

「NHKのど自慢」 出場顛末記

12.02.10 守山裕次郎

1/29 (日) に「NHKのど自慢」が守山市民ホールで開催された。昨年末、これに3人で冷やかし半分で応募したのだが、まさか本番に出場することになるとは想定外の出来事で、「春の珍事」と相成ってしまった。以下はその顛末である。

前日 (1/28)、同じ会場で予選会が行なわれ、1,200 通余りの応募者の中から書類審査を通過した 250 組が参加した。正午過ぎに予選会は始まり、16 時過ぎまで、それぞれの歌の「さわり」だけを披露し、審査結果を待つことになった。そして 17 時過ぎ、翌日の本番出場の 20 組が発表されたのだが、その中に我々3人組が含まれているのを知った時、正直言ってこれは大変なことになったと、嬉しさよりもプレッシャーと不安感で一杯になった。

実は昨年 10 月に「ねんりんピック」と呼ばれ、「シニアの国体」とも言える 60 歳以上が参加するスポーツを中心とした大会が熊本県で開催された。その種目の 1 つに硬式テニスがあり、60 歳代男子、70 歳代男子、及び 60 歳以上女子の 3 部門での県予選に優勝したダブルス 3 ペア (合計 6 名) が滋賀県を代表し出場した。

熊本での試合の合間に、お互いの親睦を兼ね、夕食後全員で市内のカラオケ店に行き、それぞれの持ち歌を歌うこととなった。今回「のど自慢」で主役を務めた 70 歳の T さんは民謡調の歌が得意で、三橋美智也の歌を数曲歌った中に「達者でナ」があった。この歌は、「手塩にかけて育てた愛馬との絆&別れ」を歌った素晴らしい曲であり、歌詞は以下の通りである。

1. ワラにまみれてヨー 育てた栗毛 今日を買われてヨー 町へ行く アー
オーラ・オーラ達者でナ! オーラ・オーラ風邪ひくな! (ああ風邪ひくな!)
離す手綱が ふるえ ふるえるぜ・・・
2. 俺が泣く時やヨー おまえも泣いて 共に走ったヨー 丘の道 アー
オーラ・オーラ達者でナ! オーラ・オーラ忘れるな! (ああ忘れるな!)
月の河原を 思い 思い出を・・・
3. 町のお人はヨー 良い人だろが 変わる暮らしがヨー 気にかかる アー
オーラ・オーラ達者でナ! オーラ・オーラまた会おナ! (ああまた会おナ!)
可愛いたてがみ 撫でて 撫でてやろ・・・

ここでそれぞれの 2 行目、「オーラ・オーラ達者でナ! オーラ・オーラ・・・」の部分が「はやし言葉」になっており、飲んだ勢いもあり小生が「うろ覚えながら」一緒に歌ってみたところ大変好評で、今回出場した女性ペアの一人・Nさんが冗談で T さんに、いつか「のど自慢」にでも出てみたら? と言って、皆で笑ってお開きになったことを思い出す。

11 月に入り、NHKテレビ (滋賀版) を見ていると、1 月下旬に「守山市民ホール」で「のど自慢」を開催する予定で、出場者を募集中という PR があった。この時頭の隅に、

熊本で話題になったTさんのことが一瞬よぎったが、そのまま忘れてしまっていた。

その後しばらくして、Tさんから電話があった。その内容は、NさんからTさんに電話があり、1月下旬の「のど自慢」に「達者でナ」でエントリーしてみたら？と言われ、それに小生も一緒に出てくれないか？ということであった。突然の申し出で、正直ためらいもあったのだが、電話を受けたのが晩酌の直後で、気持ちが大きくなっていたこともあり、Tさんには「Nさんが、鈴の音を鳴らす役でもやってもらえるならOK」と伝えたところ、折り返して再び電話があり、「彼女は二つ返事でOKしてくれた」とのことであった。

(ここに至って今更「謹んでお断りする」という訳にもいかず、応募をしぼしぶ承諾した)

年が明け、どうしたものかと心配していたところ、10日過ぎにTさんから、書類選考を通過し250組の予選出場枠に入った旨の連絡があった。(我々の場合、シニアの全国大会の県代表ということでの話題性はあるので、もしかしたら・・・と心配していたのが現実となってしまう) そうなった以上、やるからにはベストを尽くそうということで、1/28の予選会出場に向け、まずは3人で戦略会議を開き、各人の役割と衣装について議論した。

当初、Nさんは「鈴係り」とも思っていたが、小生と一緒に「はやし言葉」でのバックコーラス担当となった。衣装は、Tさん本人の強い希望で、彼自身は「麦藁帽子、作業服に手ぬぐい、長靴姿」と決定した。次に、我々二人はどうするか侃々諤々の議論となった。

(最初、Tさんは彼と同じような服装を我々にも望んでいたが、少なくとも小生は「自称：守山裕次郎」として、それだけのご勘弁を！ということで、2人は県代表のユニフォームに、Nさんはラケットを、小生はテニスボールを持って出場することとした。

次は、課題曲「達者でナ」の練習であった。予選会まで合計3回、昼間からカラオケ店に通い、ビールを飲みながら何回も何回も練習し、何とか満足できるレベルに達することができたかと思っただが、アルコールの助けなしに大舞台上で歌えるか、全く自信はなかった。

そしていよいよ1/28(土)の予選会の日となった。11時過ぎに受付に行き、「エントリーNo: 134」が決定した。翌日の本番の司会者「徳田章」アナウンサーから諸々の注意事項の説明があり、正午過ぎに生バンドの演奏のもと、250組による予選会がスタートした。(4時間余りで250組を処理するため、各組の持ち時間は各々1分弱であった)

14時過ぎに途中休憩があり、その直後に我々の出番となった。(小生はアルコールなしで何とか歌ったが、主役のTさんは、コンビニで購入した缶ビールを飲んだようであった) 予選会とは言え会場には数百人の観客がおり、「守山市民ホール」の大舞台上に立つとさすがに緊張したが、あっという間に1番を歌って終了した。(Tさんはアルコールの力もあり、声の伸びもすばらしかった) 終了後、舞台上に控えていた関係者にいくつかの質問を受けたが、かなり詳細な事まで聞かれ、もしや手ごたえがあったのでは？との感触だった。

16時過ぎに250組すべてが終了し、17時過ぎ、翌日の本番出場者20組が発表された。(発表を待つ間は極めて複雑な心境であった。折角予選に出場したのだから選出されたいという思いと、もし選ばれたら、ライブでの全国放送に耐えられるのか？という思いとが、錯綜していた) そして結果は、何となくの予感があったように、「合格」であった。

そしてここからが激動の始まりであった。選出された20組は別室に移動し、そこで諸般の注意事項の説明、司会者の徳田アナウンサーとの面談、現場での音合わせ等々があり、これが20時近くまで続いた。(小生の家は会場から4~5分の所なのでまだマシだが、遠く彦根や長浜の方は大変だろうと思われた) 家内には、親戚縁者にその旨連絡してもらった。

終了後すぐに帰宅し、遅めの夕食をとった。(改めて、大変なことになったと実感した) いつもより大目の焼酎を飲み、知人にも連絡を入れ、就寝前にUチューブで、三橋美智也本人が歌う「達者でナ」を再度聞いて0時過ぎに寝た。すぐに眠れたのだが3時前に目が覚めた。頭の中で「達者でナ」の歌詞がぐるぐるとエンドレスで回っていた。本番当日は7時50分集合ということで、そのままうつらうつらしたまま朝を迎えた。

指定された時刻に全員が集合し、本番までの段取りその他注意事項の説明があり、早速現場でのリハーサルを行なった。我々の出番は4番目と告げられた。まず各人が座るイスの場所が指定された。次に番組開始の鐘とともに、舞台の左右二手から入場する際の並び方、番組最後にゲスト歌手から与えられる、特別賞・最優秀賞の受け取り方等々の説明があり、その後最終的な音合わせを行なった。

しばらくして、ゲスト歌手の一人である「水森かおり」が普段着で現れた。我々は観客席の最前部に移動し、彼女の音合わせの様子をカブリツキで聞くことができた。次にもう一人のゲスト歌手である「前川清」が、同じく普段着のジーパン姿で現れて(何となく、うらぶれた感じのオッサンというイメージだった:ここだけの話し)音合わせを行なった。

11時過ぎに控え室に戻り、早目の昼食ということで幕の内弁当が出た。それでなくても余り食欲はなかったのだが、「冷や飯弁当」だったため余計に不味く感じた。11時半になり、「本番まで1時間を切りました」とNHKの担当者が他人事のように言っていた。昼食時、主役のTさんが担当者に、「ビールはダメですか?」と聞いたところ、「とんでもない!」と諷められていたのも大変印象に残った。(Tさんの気持ちは良く理解でき、小生も同じ)

12時前、会場最後尾の外側フロアへと移動し、ここで二手に分かれてお互いの健闘を祈り、「ガンバロー」コールを行なった。そして会場最後尾から入場し、舞台の左右二手に分かれて待機した。(そこで「本番開始5分前」とのアナウンスを聞いた時、手のひらからどっと汗が噴き出すのが感じられた)

12時15分、「鐘の音」に合わせ拍手をしながら入場し、アナウンサーの後ろに整列した。そして徳田アナウンサーによるゲストの紹介並びに守山市の紹介があり、さっそく1番の出場となった。その後あっという間に3番までが終わり、いよいよ我々の出番となった。とにかく、練習通りに歌うことだけに集中した。(会場を見渡す余裕は残念ながらなかった) なお、本番では2番の歌詞までは歌えるかと思っていたのだが、1番終了で「鐘2つ」が鳴った時には少々ガックリした。歌い終わって席に戻ると急にリラックスでき、その後は会場の雰囲気をも十分に味わうことができた。そして全員無事に歌い終わり、ゲスト歌手の歌の披露、特別賞・最優秀賞の発表等々、すべて時間通りの進行でフィナーレを迎えた。

なお、テレビ中継は13時で終了したが、会場の皆さんへのサービスとして、ゲスト歌手

がそれぞれの持ち歌を更に2曲ずつ、最優秀賞受賞の女性がグランプリ曲を再度披露し、「守山市民ホール」での「NHKのど自慢」は無事終了した。

その後我々出場者は控え室に戻り、簡単なお別れ会を行なった。NHK担当者の話ではお世辞かもしれないが、大変素晴らしい「のど自慢」であったとのコメントをいただいた。最後に全員が、今回出場の感想を一言ずつ述べて、「一本締め」ですべてを終了した。

(追記)

まるで、突然の嵐に遭遇したような二日間であった。バックコーラスの担当とは言え、大舞台の経験など皆無だったため、予選会から緊張の連続であったが、すべてが終了して帰宅した時、脱力感とともに「何となく心地よい達成感」のようなものを感じた。とに角、二度と味わえないであろう大変貴重な経験ができた。そして以下のことを感じた。

1. 人との出会いを含めた「縁」というものの大切さ、不思議さ：たまたま熊本で一緒にカラオケに行ったことがきっかけで、まさかまさか「のど自慢」出場に至るとは・・・
2. 思い切ってチャレンジすることの大切さ：迷った時には思い切って前に進むこと。
何事も腰が引けては何も生じない。(失敗するか、恥をかくことになるかもしれないが、それを恐れる限り、そこからプラスは決して生じない)
3. 全国放送の影響の大きさ：埼玉在住の従姉妹が、たまたま「のど自慢」を見ていて、守山からの中継なので、もしや小生が観客の中にでもいるかと思って見ていたら、舞台の上に立っていたのでビックリ仰天。一方で、親戚縁者、知人友人まで巻き込んでの「話題提供」の波及効果には、こちらの方がビックリ。
4. NHKの「のど自慢」という番組の目的が今回良く理解できた。それは単に歌唱力を競うことではなく、出場の20組がそれぞれの歌にまつわるドラマを提供し、見ている多くの人々の共感をいかに得るかという視点が、極めて重要だということである。
5. 出演した若者たちのエネルギーを肌で感じる事ができた。そして、縁あって一緒に出場した彼らには、厳しい書類選考・予選会を経て、本番に出られたというこの貴重な経験を踏まえ、これを一つの自信にして、それぞれの人生を歩んで欲しいと強く思った。

以上